

## 書評のあり方について

学会は全くフリーな、相互研鑽の場である。会員の様々な研究成果が批判の対象となることは言うまでもないが、諸兄のまとまった労作としての著作のため、書評欄がもうけられ、活発な紹介や論評が続けられていることに対し、先づ敬意を表したい。

本誌の書評は、会員諸公の努力をできる限り高く評価しようとし、内容的に好意的書評であることが一つの特徴であると思う。誉めることが原則であるのは、批評の常道といってよく、決して悪いことではないが、書評にはやはり書評としての原則もあるのであって、これを忘れると、いささか見当違いの書評をすることになる。私はその一例として、本誌(1993)8月号掲載の中井公太氏の、最新「気象の事典」の書評をあげることが出来ると思う。

中井氏が書評の対象としたのは個人的な著作ではない。非常に多くの人が参与して作られた事典である。今後、広い気象の分野で、スタンダードとして使われることが期待されるものだから、その影響は個人的著作の比ではない。1954年以来の、長い伝統を誇るこの最新版の刊行は、1993年の学界的一さらに広く社会的イベントと言ってもよいであろう。

だから中井氏が例示されている、ほんのわずかな項目が、よく書けているかどうかということが、内容の大部分を占めているような書評は誠に見当違いの書評というべきで、批評すべきは、この事典がどのように編集されているか、今後一つの基準として使用に堪えるものかどうか、という点にあると思う。

この点について私はすでに400字×50枚程度の具体例を満載した書評を連載したが、そこでは、いかに編集されたかを問題にし、個々の項目の内容に立ち入ることは従とした。そこで私が取り上げたのは具体的に次のようなことである。

1. 誤植の有無、原綴を示さず英文の読み違い、不適切な用語。
2. 項目相互の内部無矛盾性
3. 項目選択の一貫性(体系性)
4. 読んでみて、よくわかるかどうか。

5. はたして“最新”と言えるか。

これらに対する私自身の調べた結果は長文の私の書評を読んでもらうより仕方がないが、ここではこれらの項目につき、具体例を一つづつあげることには止めよう。

1. 本書を私は初めて手にし、およそ2時間で70カ所も誤植を見出した。私は校正の専門家ではないが、あまりにも多くの誤植に私は全くあきれた。とてもまともな校正が行われた事典とは思われない。これだけでも標準となる事典としては失格である。

2. 天気解説で有名な倉嶋、平塚両氏は老婦人の夏を小春日和とした(p22)。他方朝倉正氏は、改めて老婦人の夏を立項し、そこでは9月下旬とされた(p523)。これでは小春日和とは言い難く、季節的には残暑である。利用者はどちらを取るべきか。

3. 季節について、本事典では夏(14行)、冬(4行)があるが、春と秋には全く立項がない。本事典ではなぜ“赤道”(p264)を著名入りで説明せねばならぬのか。南極観測には9ページを費しながら、北極気象については立項さえない。

4. 利用者のことはあまり考えず、2～3ページにわたる書き流しがザラに見られる。長文の解説には小見出しをつけて、読み易くするといった努力がどれほどなされたか疑問である。

5. 巻頭の雲の写真、そのうちの1枚、高層雲の背景には中央气象台時代の無線塔がみえる。これは余程古い写真である。とても最新の雲の写真とは言えない。

私が本事典の編集担当者並に書肆に望みたいことは、早急に綿密な正誤表(誤植その他)をつくり、すでに本書を手に入れた人に配布することである。これが最低限の責任である。

(1993・9・12 根本順吉)

### 参考文献

根本順吉(1993):緊急書評・「最新・気象の事典」を読む。I～VI, きょう春秋 No.146-151